
日番谷冬獅郎（16歳）の誘惑

切香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日番谷冬獅郎（16歳）の誘惑

【Zコード】

Z2436F

【作者名】

切香

【あらすじ】

成長し、妙に大人びた日番谷冬獅郎（外見年齢16歳！）との接
し方に戸惑う乱菊。「早く落とさないと他の女に奪われる」。そう
アドバイスをされて笑い飛ばすが・・・？らぶこめ？軽く読めます。
日番谷・乱菊で恋愛色があります。オリジナル色も強いので、苦
手な方は閲覧を「」遠慮ください。

1・乱菊、虚に出来つ

星占いは好きだけど、信じるタチじゃない。結果が良いけりや調子よくはしゃいで、悪けりやわつたと忘れる。そんな程度のものでしかなかつた。

でも、さすがにこれはないわよね。そう思つた時、今日のてんびん座「12位：全て悪し」を思に浮かべたのは、無理からぬことだつた。

「松本副隊長っ！」

はつ、とあたしは我に返る。同時に何十もの獣の叫び声を合わせたような、甲高くも低くもある方向が響き渡つた。とつさに刀を引き抜き、もう「ヒト」とも「靈魂」とも言えぬバケモノ、虚と向き合つ。その体長は、8メートルほど。全身に長く黒い毛がはびこるように生えていて、その体毛をよく見ると、炎のようにつりつりと揺れ、背後の景色が透けて見える。もづ、この世にいないはずのものなのだ、とうことが一目見れば分かる。

「虚から距離を取つて！ 油断するとやられるわよー！」

あたしは部下たちに叫ぶと、逆に大きく一步踏み出した。虚は、あたしの実力を推し量るみたいに、動かない。真っ黒な全身の中で、真っ赤な口と、てらてらと光る牙がやけに獰猛に見える。アレに噛みつかれたら、さすがの死神だつて一瞬だろう。四つんばいになつたその手足には、黒光りする鷲みたいな鉤爪が生えていた。あんなものに引っかかるなら……さすがの死神だつて以下略。虚にタイプはたくさんあるが、一番厄介な、攻撃的なタイプだつてことは想像に難くない。

たく、冗談じやないわよ！

あたし一人だつたら、虚レベルだつたらどんな強さだろうが切り抜けることは出来る。そこまで考えて、ちらり、と肩越しに後ろを見やつて、思わずため息が出た。死霸装姿も初々しい三人の名は、眞田、桐村、牧。一ヶ月前に真央靈術院を卒業し、十番隊に配属されたばかりのお坊ちゃんがた。予想通り、唐突な敵の出現に、ガチガチになつちゃつて使えやしない。まあ、現世での十番隊の担当地域を案内するだけのはずだったから、無理もないけれど。この3人を誰も傷つけずに連れ帰る。それは、あたしみたいな雑な人間には不向きな仕事だ。

虚は曇天を見上げて一声、吼えた。これが元は人間の魂だつたなんて信じられない、と新人のようなことを思った時、ソイツが唐突に地面を蹴つた。そしてその牙をむき出し、一散にあたしに向かつて駆けてきた。

「まつ、松本ふく……！」

ちょっと甲高い声は、牧だらう。あたしは耳の端にその悲鳴のような声音をとらえながら、足にぐつと力を入れる。次の瞬間、激しい衝撃があたしの両腕を襲つた。その牙が、あたしの斬魂刀「灰猫」とぶつかり火花を散らす。

「ああ、言つとくけど牧」

虚の力に、あたしの腕が震える。力じや、圧倒的にあつちが上だ。

「副隊長を呼び捨てなんて、ありえないから」

「そ、そんなこと言つてる場合じや……」

「唸れ、『灰猫』」

途端に、虚が妙な唸り声を上げ、背後に飛びのいた。その顔面を、細かい灰のようなものが覆つていて。あつ、と息を飲むほどの数瞬に、虚の顔面が切刻まれ、血のしぶきが散つた。

「浅かつたわね」

あたしは、灰と化して散つた灰猫を、元の刀身の形に戻しながら、呟いた。これしきの傷では、ぎやくに猛らせるだけだ。ただ猛り狂つているだけに見せておいて、案外力もスピードも大したもの。

「冗談じゃないわよ。あたしは今日、新人達を送り届けたら現世にとんぼ帰りして、バーゲンの服を買い捲る予定だつたのに。

「あんたって寂しい女ねー。男に目もくれないで服なんて。お洒落なんてあんた、女が男のためにしないでビースンのよ」うつさいわね。あたしが今日の計画を告げた時、いかにも呆れた、という顔で呟いた、赤い唇を思い出す。

「まつ、松本副隊長！ 僕も戦います！」

あたしが考え方してうるのを見て、押されてると思つたんだら、真田が一步前に踏み出してきた。

「…………あんた、峰と刃逆だけビス？」

「えつ…………あつ……！」

慌てた挙句、刀を取り落とす真田。いやいやいやいや、ここまでキンチヨーしてんのよ。まあ、上司とはいえレディーを庇おうとする初々しさは褒めてあげるけど。

「覚えときなさいよ。実戦では、落とすときは刀も命も一緒に

「はつ、はい！」

こいつらの実戦には、田の前の虚はでかすぎる。正直言つてやつぱり、「ゴメン」いうむりたくないよつな、あたしが大嫌いなシチュエーションだ。だからってねえ。これくらいで隊長の手を借りるわけにはいかないし。今頃、隊首室で書類と睨めっこしているはずの銀髪を、あたしは思い出す。

松本。オマエな。

きつと、これくらいで連絡取つたら、あの眉間のシワがさらに深くなってしまうだろう。もしかして、ほんのガキンちよだつたことと同じくらいまで。でも、このまま新人にケガでも負わせたらどうな

うつだる。

まー・つー・もー・とー！

「逃げなさい、アンタたち」

あたしは、即座に背後の三人を振り返った。

「これくらしあたし一人でしとめられるから先に帰ってきてなさい」

そうしないと、あんたたちが怪我したら、あたしがこりびどく怒られるのよ！しかし。そんなあたしの心の声は、新人たちには伝わらなかつたようだつた。

「さあ、おまえの手でアーヴィングの死を防ぐんだから、おまえの手でアーヴィングの命を救うんだ！」

勇ましくもそう言ってのけたのは桐村。いいトコの坊ちゃんらしく、すんなりした髪はツヤツヤで、真面目を絵に描いたような顔してる。言つたらなんだけど、流魂街出身の隊長とは人種が全然違う感じ。そんなでも、天才肌の隊長に憧れて十番隊を志望した、真央靈術院の優良株だと聞いてた。

「あ！ あんたちょっと待・・・・」

やああああ！！！」

あたしが手を伸ばしたときには、桐村は大きく斬魂刀を振りかぶり、虚に向かつていつていた。

そんなへつぴり腰で、虚が斬れるわけ無いじゃない！

案の定。桐村が振りかざした斬魂刀は、力キン、と音を立てて虚の肩に当たつて……止まつた。

虚があるで人間みたいに肩を掌ておさえると痛みのこもった喉哮を上げた。その大声に、大気がビリビリを震える。

ダメ、
ね。

でも、刀が当たった肩は、血ひとつ滲んでいない。それでも虚を更に怒らせるには十分な一撃だつたらしい。危ない、と察したあたしが動くよりも、反撃は一瞬早かつた。

「う、わあああ！」

振りかざした腕の一撃に、桐村はあたしたちとは逆の方向に吹っ飛ばされた。

「危ない！」

あたしは斬魂刀をとつさに引き抜き、桐村の元へ奔った。

虚のほうが早い！

虚が、その爪を目の前の桐村に突きたてようとするのが見えた。どうにかしたいけど、こんな距離じや瞬歩だつて間に合わない！あたしの脳裏が真っ白になつた、その刹那だつた。

バシッ！！

鈍い音と共に、虚の体が背後に吹つ飛ばされる。

その場には、何も見えなかつたにも関わらずだ。

虚も、さすがに何が起きたか分からなかつたのか、着地したまま目を見開いてる。

これは……靈圧の磁場？

死神も力を極めると、まるで台風のような靈圧の渦を持つようになる。近くに寄ろうとするだけで、並の虚なら消滅させるほどのその力を、靈圧の「磁場」と呼ぶ。「その場を支配する」という意味を込めて。

もちろんそれほどの力を、誰もが持つてゐわけじゃない。あたしの知る限り、こんなトコにあつさり来てくれそうな当てはまる人物はひとりだけ。あたしは、そーっと後ろを振り返つてみた。

2・変わらない翡翠

「なにやつてんだよ」

自分の靈圧で、その銀色の髪が下から煽られるように揺れている。予想通りだった。目の前に立っていたのは、十番隊隊長・日番谷冬獅郎。鹿を思わせる、すんなりと細いその後姿は、男としてはまだまだ発展途上だったことを思わせる。それほど深刻そうでもない聲音でそう言つと振り返り、「虚とあたしたちを見比べた。桐村が這うようにして戻ってきたのを、笑うでもなく翡翠の瞳が見下ろす。あたしが実はこれほど綺麗なものはないって思つてる（直接言つちやいるけど、本人は絶対認めない）、空や海を思わせる美しい青。

やつぱり、今の今まで書類整理してたわね。

ぐるり、と肩をまわすのを見て、あたしはそう思つた。書類整理に集中してて、ふと窓の外の景色にでも気を取られて、意識を反らした瞬間・・・
あたしたちのことに気づいたのだね。

あたしは斬魂刀を構えると、虚とあたしたちの間に立つ隊長の元へ走り寄つた。

「隊長！　ここはあたしがやります！」

やつぱり、こんな虚一体退治するのに隊長の力を借りたら、副隊長の名が泣く。隊長は落ち着き払つた視線を、あたしと刀に向かた。

「いい。俺がやる」

「けど」

言い募りとしたあたしの、刀を持つてゐるほうの腕を取り、ぐい、と下におろさせた。その反動であたしの体が一步隊長に近づき、あたしの頭がゴツン、と隊長の肩にぶつかつた。

「す、すいません」

謝つて顔を上げたとき、あたしは全然別のことにつヨウツとして、思

わざ隊長の横顔をじっと「見上げた」。

……隊長。

あたしより、身長高くなつてない？

その表情はやつぱり隊長だけど、ぐんと大人びていることに、あたしは唐突に気づいた。

あたしの目の前に翻る、「十」の数字が黒々と刻まれた隊首羽織。それを見たとき、ふつと思い出す。あたしよりも40センチも低い背丈のくせに背伸びして、仲間を精一杯護ろうとしていた小さな背中を。それは、もう遠い遠い昔の話だ。

嬉しいような、ちょっと寂しいような。ビニから見ても、押しも押されぬ隊長に成長したその背中を、あたしは見守る。

もう人間並みの思考なんて無くしてしまつてゐるはずの虚も、本能的に危険は察するんだろう。虚は、混乱の混じり始めた咆哮を途切れ途切れにあげているけど躊躇いがあるのか、かかつて来はしない。ただ、逃げる気も毛頭なさそうだ。ギラリと爪先が光り、隊長は虚にちらつと視線をはしらせた。

「大丈夫です。あたしでも、すぐ倒せますよ」

いまや500人に迫る大所帯を切り盛りするために、現場にひよいひよい出てくるような余裕はないはずなのに。なんでわざわざ来てくれたんだろう。そうあたしがいぶかしく思ったとき、

「バカヤロウ」

隊長は静かに、でもはつきりとした聲音であたしを叱りつけた。

「は？ って隊長、なんで？」

「分からねーならさがつてゐ」

ワケ、わかんない。虚を隊長の代わりに倒そつとして、逆に怒られるなんて。「？」マークをいっぱい浮かべたあたしを無視して、隊長は猛り立つ虚に向かつて無造作に歩き出した。

「い？ ちょっと、隊長！」

「なんだよ、隊長隊長つるせーな」

それどこじやない。あたしは負けじと声を張り上げる。

「刀は？ 氷輪丸はどうしちゃったんですか！」

「隊首席においてきた」

「はあ？？？」

叫んだのはあたしだけじゃなく、新人たちも一緒に。なに？ それ、忘れたつてこと？ 言うまでもないことだけど、死神が戦いに刀を持たないなんて、飛ばない鳥、足がない馬みたいなもんで使い物になりやしない。戦えないのはもちろん、魂葬だつてできやしないじゃない。

「まつ、丸腰で一体なにしようってんですか？」

「刀なんていらねーん……」

隊長があたしたちを振り返った時だった。

でたらめに繰り出した虚の爪が、隊長の頬を掠る。

「だ！ だいじょうぶですか！」

「いいから下れ」

隊長は、拳の甲で頬から流れる血をぬぐつた。

隊長は、虚を見据えたまま、ゆっくりと歩みを進める。その後姿を、あたしたちは口を挟めず見守った。息詰まるような緊張が、ピント辺りに張り詰める。

そして、その緊張にいち早く耐えられなくなつたのは、虚のほうだった。隊長のこの靈圧をまともに受けてるんだから無理もないと思つけど、唐突に悲鳴のような甲高い声を上げて、隊長にその爪をもう一度向けた。

「危な……！」

「六杖光牢」

落ち着いた声が、その場に凜と通つた。それと同時に、一瞬で現れた六本の光の柱が、虚の動きを完全に止める。虚は一瞬「おや？」

つて顔をして、それからすさまじく暴れた。でも、暴れたところで靈圧の戒めは解けはしない。隊長は、そんな虚に向かつてさらに近づいた。

「怖がらなくてもいい」

ぽつん、と落とされたその言葉は、熱したその場面で、まるで一粒の清涼剤みたいに響いた。どうなるのかと息を詰めて見守っていたあたしたちも、虚も、隊長に視線を向ける。

「……虚も、元々は人間なんですね。不幸な死に方をした」
真田が、今日が覚めたみたいな声で誰ともなしに言った。そう、それはその通りだ。人間は死ねば、普通はそのまま死神に魂を導かれてあの世……ソウル・ソサエティに連れていかれる。そうならず、虚に姿を転じてヒトを襲う虚には、全てそなうならざるを得なかつた、哀しい理由があるものだ。

「……！」

虚が、何かを叫んでる。その獣の叫びが少しづつ人に近くなり、あたしたちはハツと耳を澄ませた。何かを訴えようとしている。虚があたしたちに。

「……クナイ……」

「……え？」

「シニタクナイ！……シニタク、ない」

「……あんた」

あたしは、思わず虚の顔を見た。泣いて、いる。

あたしはその時、分かつたのだ。どうして隊長が、あたしに「バカヤロウ」って言つたのか。虚は敵、倒すべきだ、と迷いもなく思つたあたしから、隊長は叱つたんだろう。……それだったら、あたしよりもこの新人達のほうがまだ、虚の正体を知つてている。

隊長は、そんなあたしの反省を感じ取つてゐるのかないのか、虚を見上げた。

「そんなこといってもなあ

特に困ったようでもなくそう言つて、後頭部に手をやる。

「率直に言つて、お前もつ死んでんだよ。わざかい死ぬことはねーから、安心しろ」

空氣読め。

あたしは思わず突つ込みそになる。それは、全然なぐさめになつてないわよ。そして、（当然ながら）虚は、更に混乱の度を深めるように見えた。

「隊長、危険です！」

あたしは思わず、隊長に手を伸ばそうとして……手を途中で止めた。まるであたしの手に押し出されるように、隊長がスッと一步踏み出し、指先を虚に向けて差し伸べたからだ。それと同時に、虚を束縛していた六枚光牢がその場から霧散し、虚は自由になる。

突然戒めを解かれた虚は、その場でたたらを踏んで体勢を立て直した。戸惑つたような視線を、隊長とその手に交互にまわせた。

「来いよ、あの世に連れて行つてやるから

その聲音には湿度は全くなかつたけど、やせじへ聞こえた。

「痛い……！ 痛い、よ

」の声。

虚の聲がはつきりと聞こえるにあたつて、ようやくあたしは理解した。この虚のもとの姿は、子供だ。それも、たぶん3歳か4歳くらいの、言葉を覚え始めたくらいの女の子だ。ただ、泣きじゃくっている。

「皆があたしをいじめるの。こわいよ

8メートルほどの虚から聞こえてくるのは、あまりにか細い声だった。

「あの世には、そんなヤツいねえから。俺が保証してやるよ

ソウル・ソサエティは、ここ数十年で劇的に治安がよくなつた。

特に十番隊の管轄エリアについては、隊長自ら身体を張つて治安維持にあたつたため、危険に脅かされながら暮らせなければいけないことは、なくなつてゐる。

「この女の子に、そんな事情が分かるはずはない。『保証する』と断言した死神の正体が、隊長格だなんてことも、しらない。でも、明らかに虚は、頭を垂れてその言葉を「聞いた」。その五十センチほどの爪が光る腕を、ゆっくりと隊長の手に向かつて伸ばすのを、あたしたちは無言で見守つた。その爪先が隊長を傷つける、そう思つた時、ふう、と虚の姿が風船みたいに、しほんだ。

そこに現れたのは、やっぱり3歳くらいの小さな、小さな女の子。ピンク色の、色あせたワンピースを羽織つていて、髪はぼさぼさ。その大きな目だけが、物いいたげに見開かれている。その小さな指先が、隊長の掌に、触れた。

「ほんとう？　いじめるひと、いないの？……ママもいない？」

最後の言葉に、隊長がスッと瞳を細める。なんてことなのよ。あたしは拳を握り締めることしかできなかつた。もしかして、この子を死においやつたのは。

「だいじょうぶだ」

小さな手を取り、そつと自分のほうに引き寄せる。小さながらだが、隊長の胸におさまつた。

「こ、こんな小さな女の子が、あんな大きな虚になることがあるんですか？」

新人の三人は、事態についていけないんだろう、目を見開いたまま硬直してゐる。

「まあ、ね」

あたしは頭に目を遣つた。

「虚の強さとか大きさって、生前の姿とは関係ないのよ。負の感情が強いほど……つまり、死ぬときに辛くて苦しい思いをするほど、

虚は大きく強くなるの

こんな小さな女の子が、その体の中に納まらないほどの負の感情を押し込めて死んだ。

つまりは、そういうことなのだろう。

そして、それに気づいていたから、隊長はわざと斬魂刀を持つてこなかつたんだ。この子を、これ以上怖がらせないために。

隊長は、右手で女の子を支えてあたし達を振り返った。昔の隊長なら、人前で誰かにやさしくするのは避けてた記憶がある。はずかしいっていうか、てれくさかつたんだろう。

「帰るぞ」

女の子に向けられた視線は、あたしたちを前にしても、やさしかった。隊長の首にしつかりと腕を巻きつけて、肩に顔を伏せている女の子を見て、あたしは何だかぎゅっと胸に迫るものを感じた。

いつまでも幼いままじゃない、か。

藍染隊長の反乱から、すでに50年。少年は、体だけでなく心も、ぐんぐんと成長してるんだ。

「覚えとけよ、お前ら」

隊長は、慌てて真田が開いた穿界門に足を運びながらあたしたちを見た。

「俺達の仕事は、虚を倒すことじゃない。魂を護り導くことなんだ。間違えんな」

ああ。

ホントに、不器用ね。

次期総隊長としてソウル・ソサエティ全土に目を配りながらも、女の子の悲鳴は聞き逃せない。そしてそのたび、立場も忘れてひよいひよい戦いに飛び出して、あっさり怪我なんかして。でも、そんな隊長だからこそ、あたしたちはずっと焦がれ続けるんだ。

「はい！」

あたし達は頷くと、先を行くその背中に従つた。

「なーんか。つまんないのよねエ」

時刻は、夜の十一時前。あたしは、数少ない女の酒飲み友達、八番隊第三席の椿と酒を酌み交わしてた。腰まである髪をきつぱりと結い上げ、露になつたうなじが、女のあたしから見てもイロつぽい。そのくせやけに男っぽい口調で、歯に衣着せぬ物言いがあたしは気に入つてた。

「つまんないのは、アンタだろ」

ホラ、今も。今日のあたしが妙な酔い方してるのは、あたしにだつて分かつてるつての。時刻も時刻だし、明日も平日で仕事が有るし、飲んでた死神たちは多くは帰っちゃつて店内は人もまばらだ。

「何が気に食わないんだよ、何が。あんた、ちょっとゼータクなんじやない？」

椿が、その杯を真っ赤な唇へと運ぶ。その瞳が、仇っぽい光を浮かべてあたしを見下ろしてた。

「あんた、次期総隊長の元で働いてるんだよ？ 出世間違いなじじやないか。しかも日番谷隊長、あんた達のために、わざわざ王属特務への昇進を蹴つたんだろ？ 上司の鏡だと思つけど」

「……別にあたし達のためつてだけじゃないわよ」

あたしは、ほとんど空になつた杯を指先でくるくるともてあそびながら、顎をテーブルの上に付けた。どつからどつ見ても、ただのヨツパライだ。

隊長が王属特務へと何度も押されたのは知つてた。一度目は、藍染の反乱の直後。二度目、三度目もあつたらしい。王属特務への配属といえば、流魂街出身の死神としては、初の快挙になる。それほど昇進を断ることも、本来ならできないはずなのに。それでも隊長は、それを固辞し続けたといつ。その理由……あたしは、分かり

すぎるほど、分かるんだ。

藍染隊長の反乱後、あれはてた瀬靈廷やソウル・ソサエティを眺めていた横顔を見てしまつた、あたしには。そして、戦いに疲れ果てたあたし達死神を見て、それに背を向けるなんて出来るはずがない。

あれから五十年、ソウル・ソサエティは命を吹き返した。そして、それに尽力した隊長が総隊長の跡を継ぐのは、そう遠い未来じゃない。

椿は、あたしの言いたいことがまるで分からぬ、って顔をしてため息をついた。当然だ。

「じゃあ何が気に入らないのよ。あんた昼間、現世にバーゲンに行つてたんだろ？ 戰利品がなかつたとか？」

「ああ、あれね」

あたしは、ますます陰鬱な返事を寄越した。

真昼間から、こいつそり茶菓子を買ひに行くフリをして現世へ向かう、そういうこいつもつだつた。1時間も帰らなきや怒られるかな。でもまあ、一時間くらい、何とかなるでしょ。そんな我ながらテキト一な計画を立ててた。

「たいちょー。そろそろ3時ですよ。お茶菓子切らしてたんで、買つてきますね

「ああ」

隊長は、筆をわらわらと動かしながら、あたしには目線もくれずに、そう返した。これほど集中してたら、もしかしたら三時間やそこら帰らなくとも、気がつかないかしら。そう思つて、現世の服を押し込んだ紙袋をこいつそり持ち運ぼうとした時。

びりびりびりつ！

大きな音を立てて、紙袋が破けた。そりや、中にブーツとか入れてたから、重くはあつたんだけど。あたしは、床に散らばった服をとつさに自分の体で隠して、ははは、と妙な照れ笑いを浮かべた。

ばれた。ぜーつたに、ばれた。

隊長は、書き終わった書類をひょい、と机の脇に置いて、また次の書類を取り上げたところだった。

「た、隊長？」

無視は余計、怖い。あたしに呼ばれて、隊長は緩慢な動作であたしを見た。

「『石榴』の甘納豆もついでに、買つて来いよ」

石榴。それは、隊長がお気に入りの甘味どころである。しかも、「現世」の。

「えつ、あつ、はい！」

「夜までには戻れよ」

予想していた怒声は全く飛んでこず。扉の外に押し出されたあたしは、なんとも釈然としない思いで、現世に向かったのだった。

「釈然としないわ……」

「つて、釈然としないのはコッちよ。今の話のドコが気に入らないわけ？」

「全然、まったく、100%、気に入らないわよ？」

「ドコが？ 非の打ち所がない隊長でしょうが」

「それよ」

あたしは、空になつた徳利を横に押しやりながら、椿を指差した。

「隊長が、おもしろくない」

「……は？」

さすがにこれは予想してなかつたのか、椿がキヨトンとしてあたしの顔を見た。

「おもしろくないのよ、ぜんぜん！」

ダン、とあたしは拳で机を叩いた。周りに残つてた死神達が、慌ててあたしたちから目をそらす。

「最近の隊長、角が取れたつていうかさ。前はもっと無理して大人ぶつてたじやない。それを崩すのが面白かったのにー。『小さい』なんていわれるたびにムキになつたりしてさ」

「……だつてもう、アンタより身長高いだろ」

「それにさー、前は仕事サボッたら意地でも追つかけてきたのよー。? それがさあ」

「それはもう、さつき聞いた」

「それに、それにさー」

言つて、どんどん声が小さくなる。そもそも、あたし何が言いたかつたんだっけ?

そんなあたしを見て、椿はふう、とため息を漏らした。

「要は、寂しいんでしょ。隊長にかまつてもうれしくて」

う、とあたしは言葉に詰まる。

そつまともめられたら身も蓋もないけど、言い当てる感がないわけじゃないっていうのが微妙。

隊長自身は、子供だったころよりも堅苦しさが抜けて、より自然体になつた。

逆に「子供っぽくなつた」って言い換えてもいいくらい。

付き合いの席にも顔を出すようになつたし、笑顔を見せるようになつたから、近づきやすくなつたつていう死神は多い。それなのに、何だからあたしだけ、変なんだ。からかおうとしても、フフン、つて余裕の笑みで流されたりするし。

おかしい。隊長とあたしの関係は出会つて以来、そんなんじやなかつたはずなのに。

「居場所がつかめないの、なんか」

あたしは頭を抱えたまま、ついにそう打ち明けた。

隊長はあたしといても全然ムリしなくなつた。それなのにあたしは、今の隊長とどう接したらいいのか分からぬ。これまで夢にも思つたことなかつたのに、「隊長はあたしのことどう考へてるんだろう」とか、「そもそも必要とされてるんだろうか」なんて思つようになつたりして。

椿は無言で、あたしが手で遊んでいた杯に、酒を注いだ。あたしは脱力しながら、水音が杯を満たすのを見やる。

「無理して大人振らなくなつたのは、大人になつたからだよ。いつまでも子供だ子供だと思つてゐるから、おかしくなるんじゃない?」「やがて発せられた椿の言葉は、思つていたより何だかやさしく聞こえた。仕方なく、あたしは頷く。

「それは、分かつてゐわよ……」

悔しいけど、自分の杯を手酌で満たして唇に運ぶその姿は、あたしよりも大人のオソナに見える。

スッ、と唇の中に軽やかに酒を流し込むと、今度はイタズラっぽい視線をあたしに投げた。

「大体、そんなこと言つてゐる場合ぢゃないよ、乱菊?」

「どーいう意味よ

あたしは、打ち明け終わるとなんだか拍子抜けして、酒を一気に口の中に流し込んだ。

「今のうちにツバつけとかなきゃダメだよ。取られちまつよ

「は? ツバ?」

「ヤツちゃになつてことよ

ブツ!-! とあたしは返事の代わりに酒を噴出した。

「なーによ、アンタ。今更ウブ気取つたつてムダだつて」

「隊長はダメよ、絶対ダメ!-!」

あたしはむせながらも、顔の前で手を振つた。いきなり何てこと言

うんだ、この女は。

「なんで？ 身長差は埋まつても、年の差は埋まらないから？」

「一言多いのよ、あんたは。そーいう問題じゃないわ」

「いい？」と乱菊は酔つた瞳を椿に据えた。

「ゼーんぜん、お子様よ？ このあたしのナイスバディを見ても、未だに赤面ひとつしないし。仕事以外で女といふことじつって、見たことないわよ」

そりや、こきなりオッパイで吹つ飛ばされるという初対面が、のちのトライアゴになつたつていうならお詫びしたい。でも、女にそもそも免疫がないとか、関心がないらしいのだ。確かに年齢から言つても、そろそろ浮いた話のひとつやふたつ聞こえてきそうなもんだけど、隊長に限つてはまったくそんな話はないはずだった。

「そう？ もつたひないな。相当の上玉だとあたしは睨んでるんだけど」

「上玉……」

あたしは絶句する。遊郭に通う若旦那が、遊女を指すような形容するな。

「なーに、妙にノリ悪いな。こいつ話好きでしょ？」

「隊長は話の肴にはならないわよ、バス」

あたしは手首の力を抜き、手をひらひらと振つた。

隊長は、隊長。

そういう田で見る」と自体、絶対のタブーだとあたしは思つてゐる。もしかするとあたし、そういう意味では隊長よりもお堅いのかもしない。

いつもとは違うあたしの様子を、椿は興味深そうに見やつた。

「そーお？ ジャああたし、もうつかつていー？」

「隊長に手玉出したら、ロロス」

あたしは物騒な言葉を吐くと、席を立つた。あんなお子様な隊長が、椿に翻弄されるなんて、考へるだけでいたまれないんだけど！

「アンタ、自分で今頃いたくせに」

踵を返したあたしの背中に、笑いを含んだ椿の声が投げつけられた。

「隊長はもう大人になつたんだって。それを認めてないの、いまや

アンタだけだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2436f/>

日番谷冬獅郎（16歳）の誘惑

2010年10月10日18時34分発行